

展示「奈良絵本」形態いろいろ

期 昭和7.9.20 ~ 10.2

於 図書館3F閲覧室(渋谷)

。奈良絵本

元来は奈良の春日神社の絵所の絵師の筆になつた挿絵があるところから、自然に生じた名称である。絵巻物の系統を引くもので、足利時代の中期頃から、江戸の初期、元和、寛永頃まで、盛んに流行した。すこぶる豪華な本もあるが、これらの絵が貧弱になつた類のものが、枕本、即ち横綴じの御伽草子関係の本に、多く存在する。

(1) 蓬萊山

。卷子本 2巻 極彩色 奈良絵上巻五枚 下巻四枚

奥書内題なし

蓬萊山にあるという不老不死の靈薬に関する話を中心として、その仙山の由来・勝景その他を見た和漢の人々の諸伝説特に最後に紀州名草郡の一漁夫安曇の安彦の浦島式神仙譚を物語つてゐる。

(2) ななくさ

写本一冊 絵四枚 奥書なし [享保頃写]

孝行物語、由来談で、正月七日に七草を摘んで帝の供御に供へる由来を中国の孝行息子をおして

物語つてゐる。

(3) しゅてんどうじ

折本三帖 表裏共折込帖装

「寛文頃」 箱書「大江山」

源頼光が都に出没し、娘をさらう大江山の鬼「酒吞童子」を住吉、石清水、熊野の三社の神々のたすけを受け、退治する英雄武人譚。

この折本は豪華で、以前は卷子本であつたものを折本に装幀しなおしたのではないかと考えられる。

(4) たやら藤太

写本二冊 横綴本 絵上巻六枚 下巻七枚

奥書、内題なし 識語付箱蓋を存す

平安時代中期の武人、田原藤太香郷の武勇を語る物語。上下二部から成り、上巻は瀬田の橋で大蛇の姿で往来の人の器量を試していた龍女に見込まれ、琵琶湖に住む龍王の一族を悩ます三上山の百足退治を頼まれ、見事仕留めて数々の宝物を贈られる内容で、下巻は当時関東に威を振った平将門を智略をもちて射殺する話である。

※次回 展示は「下田歌子関係資料」(期10.4 ~ 10.16) を予定しております。

今回は、「奈良絵本」ともに様々な書物の形態をご覧下さい。

① 卷子本

「かんすほん、けんすほん」と読み、中心に軸を置き、それに絹や紙をまきつけた古い形の本。

② 折本

「おりほん」と読み、帖装本ともいう。巻き物を初めから、同じ幅に折り畳み前後に表紙をつけて製本したもの。卷子本は途中又は巻末を見たいときでも、初めから広げて、かきたいだけなので、その点折本形式は便利である。

③ 横綴本

「よこじほん」、横本、横切本ともいう。縦に比べて横が長し和装本である。